

◎総長選挙にあたっての議会報告に対する批判に答えて

私たちは、昨年12月の臨時宗会における総長選挙の議会報告として、宗門として莫大な損失を蒙りながら、その責任を誰一人として取ろうとしないということでもいいのか。そして、その損失額として、長年、宗門を取材してこられた記者の指摘として、1,500から1,600億円という数字を紹介しました。その指摘を受けた時、損失額を京都駅前不動産のみを考えているのではないか、宗教施設東山浄苑を忘れてはいませんかという指摘に思い至ったものですから紹介したものです。

その報告に対して、他会派から、厳しい批判がありました。他の会派から私たちの議会活動に対して注文を付けられる所ではないと、完全無視を続けてきましたが、この度の議会で、私たちの所見を開陳する機会をえましましたので、ここにお伝えしたと思います。

ご一読いただき、ご意見、ご批判等いただけましたら幸甚に存じます。

本廟維持財団問題についてお尋ねします。

一昨年12月の最高裁判決により、本廟維持財団に関わる宗派の財産及び棄損された宗教的価値の回復は、もはや今後取り戻す機会を失ってしまいました。

この問題は、いわゆる本山問題に起因するものであり、その責任の所在ということ言えば、本山問題以降の歴代内局と議会にも責任があることは明らかです。

とは言え、この度の訴訟が本廟維持財団との最終的なものであり、その敗訴によって、本来、宗門の財産であるはずの本廟維持財団を失うことが決定した以上、当該内局の責任は重いと言わざるを得ません。しかし、あたかも、敗訴も仕方がないと、誰一人責任を取ろうともせず、責任の所在も不問のまま今日にきている感があります。

私たちは、昨年12月の総長選挙についての議会報告で、この問題を取り上げ、莫大な宗門の財産が失われたのに、誰一人、責任を取ろうとしないということの良いのかということと、失われた財産には、京都駅前の不動産を中心とする資産と、宗教施設東山浄苑を同時に失ったということを見落としてはならないと提起しました。

ところで、この度の敗訴の責任は、当該内局だけにあるのではなく、同時に、私たち議会にあることはいまでもありません。そして、議会としてその責めを果たすには、敗訴の原因を明らかにし、失った損失額を公表し、門徒に対して謝罪することではないかと考えます。

昨年8月の真宗誌上での本廟維持財団問題対策委員会から出された報告書では、最高裁の判決は、はじめから答えありきの不当なものであったとありました。全く、判決の不当性については同感であります。ただ、私たちが知りたいのは、最高裁判所から正当なる判決

を引き出すために、当局は、必要にして十分な対策を如何に講じられたのか、あるいは、代理人の選定に問題はなかったのか等々であります。現内局は、当該内局ではありませんので、お尋ねするのは筋違いとのご批判を受けそうですが、内局としての継続性、一貫性といううえから、また、総長ご自身がこの問題を担当された参務であられたことから、お尋ねすることは、それ程的外れでもないかと存じます。

さて、損失額についてであります。私たちは、先の報告で、長年、宗門を取材してこられた記者の示された試算として、1500~1600億円という数字を紹介しました。この数字を聞かされたとき、それまで、私たち自身、京都駅前の7600坪の広大な不動産にのみ思いを致していましたが、宗教施設東山浄苑のことを忘れてはいませんかという指摘を受けたように思いました。つまり、東山浄苑そのものが持つ宗教的価値と東山浄苑によって棄損された宗門の損失分については、本来、プライスレスで金額として換算出来るものでももちろんありませんが、そこをあえて、換算し、不動産資産を加えるとこういう数字になるのではないかと、外から宗門を見届け続けてこられた方から教えられた思いがして、紹介したものであります。

つまり、私たちにご縁のある関西に転居されたご門徒のなかで東山浄苑に帰属された方が少なからずおられます。勿論それだけではなく、もともと東山浄苑に帰属されているご門徒のほとんどは、本来、大谷派門徒として共に歩まれるご門徒であつたはずの方々ではないでしょうか。あるいは、文学賞としていまや社会的に認知されている、親鸞賞や蓮如賞によって、多くの人たちから、あたかも宗祖や蓮師の正当なる継承者として受け取られ、浄土真宗としての東山浄苑の宗教的評価は大きいものがあると思われまふ。また、宗祖や蓮如の著作も多くおありの著名な小説家が、長く、大谷派の本山を東山浄苑だと間勘違いしておられたという笑えない話があるほど、その認知度は私たちが思っている以上に大きなものがあるようです。その東山浄苑もすべて、失ってしまうことになりました。

ところで、今、宗門の労務環境が厳しく問われています。中でも憂いるべきは、「一人ひとりが尊ばれる世界の実現」を教化テーマに掲げながら、一人を見失うパワーハラメントという問題を突きつけられていることです。パワハラについては、今回が初めての問題ではありません。これまでも何件かのパワハラ事象がありました。しかし、問題は、それらの事象で誰一人責任を取らされたものを知りません。責任を取るというのは、その事象をなかったことにしないということでありまふ。そのことに学ぶことで、今後の再発を防ぐこととなります。なかったことにする限り、これからも残念ですが、繰り返されることになるでしょう。責任を取らせない、責任を取ろうとしない、無責任体制が宗門に蔓延することを恐れます。

そこでお尋ねします。当該内局ではありませんが、内局として本廟維持財団を失ってしまったことに対する責任をどのようにご認識されているのでしょうか。以上です。